



## 【奈文研】「ひかり拓本」で資料に直接触れず 拓本を作成

拓本は、石碑に刻まれた碑文や対象の凸凹した形状を取得・保存するために使用される代表的な手法です。拓本には湿拓と乾拓の二つの手法があります。湿拓には、対象に直接墨をつけて紙に写し取る直接湿拓、対象表面にあてた紙を水で湿らせ、その紙の上から正絹等に綿を詰めたタンボで墨を付けていく間接湿拓があります。乾拓は簡単に説明をすると、コインの上に紙を載せて鉛筆でこすると表面の凹凸が浮き出てくるという、あの手法です。拓本は中国の唐で1,300年以上も前からおこなわれてきた優れた手法ですが、どうしても対象に触れなければならず、汚損の可能性が残ります。

いっぽうで、現地で碑文を手軽に読む手法としては、懐中電灯を使って斜めから光を当て、できた影から文字を推測する側光法が挙げられます。この手法は、その場で刻まれた文字を読むために、もしくは表面の凹凸を視認するため、IT化が進む現代においても、よく使われる手法です。この側光法の欠点は、懐中電灯等、光源を動かすと影も変形するため、前の影の形を脳内で補完しつつ字形を推測しなければいけないところです。経験のある方は、変形する影を何とか合成できないだろうかと、一度は考えた

ことがあるのではないかでしょうか。

今回ご紹介する「ひかり拓本」は、側光法でできた影を記録します。光の角度を変え、変化する影を順次記録し、最後にすべての影を合成することで、非接触で拓本と同程度の画像を作成できます。

使用する機材はデジタルカメラと三脚、画像処理用のタブレットPC、懐中電灯の4点です。さほど細かな影を記録するのでなければ、デジタルカメラはスマートフォンやコンパクトカメラで問題ありません。撮影中にカメラが動くと、合成の時にずれてしまうため、撮影中はカメラに触れないように、レリーズやリモコンを使用してシャッターを切れます。最近ではカメラのシャッター操作やPCへの画像転送もおこなってくれるソフトが、カメラメーカー等から公開されており、無償のものもあります。それらを利用すると、撮影から画像作成までがスムーズにおこなえます。画像を作成するための画像処理時間は、画像1枚につき凡そ1秒前後そのため、現地で画像を確認することが可能です。

現在、金石文のみならず木器や銭貨等の考古遺物への使用も始まっています。さらに、この手法を誰でも利用可能にするため、Windows版のソフトを作成しています。その後、撮影と画像処理を同一の機材で実行するスマートフォン版等順次公開していく予定です。 (埋蔵文化財センター 上相 英之)



撮影の様子



処理前(左)と処理後(右)



## 発掘調査の概要

### 藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第205次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部の様相解明を目的として、大極殿院の調査を継続的におこなっています。今回は東面北回廊の未発掘部分と、昨年度の調査でみつかった大極殿後方東回廊の北方に位置する内庭部にかけて、約1,500m<sup>2</sup>の調査区を設定し、東面北回廊の柱位置の確定と内庭部の整備状況の解明を目的として、調査を実施しています。調査は2020年4月3日より開始しましたが、新型コロナウイルス感染症の流行による緊急事態宣言の発出を受けて、一時中断しました。その後、緊急事態宣言の解除を受け、5月25日から調査を再開し、現在も継続しています。いつもは発掘調査の現況報告をおこなっていますが、今回は発掘現場での感染予防対策についても紹介いたします。

発掘現場では奈文研の研究員だけでなく、発掘作業員の方々も多数従事しています。今回の現場では新型コロナウイルスを想定した「新しい発掘作業スタイル」を目指して、三つの対策を実践しています。

一つ目は、日々の検温による体調管理です。研究員と作業員の全員が出勤前に検温をおこない、体調が悪い場合は無理せず休むようにしています。各自の体温を記録するために、検温表も作成しました。

二つ目は、手洗いとうがいの徹底です。発掘現場では土や泥で汚れることがありますので、これまででも手洗いやうがいは適宜おこなっていました。しかしながら、この発掘現場では休憩のたびに必ず手洗いとうがいをおこなうように徹底しています。

三つ目は、「3密」を避ける対策です。発掘現場には休憩所として、プレハブ小屋があります。休憩

の際は窓を開ける等十分に換気をとるようにしています。また密集を避けるため、屋外にテントを2張り設けて、休憩時でも身体的距離を保てる環境を整えました。

発掘作業は屋外での作業です。体に負荷のかかる作業が中心ということもあり、熱中症予防の観点から、作業中は適宜マスクを外しています。そのため、身体的距離を十分に確保しながら作業をおこなうようにしています。まだまだ試行錯誤の部分もありますが、以上のような感染予防対策を実施して、発掘調査を進めています。

最後に、発掘調査の現況をお伝えします。まず、これまでの調査と同様に、戦前に大極殿院を調査した日本古文化研究所の調査範囲の検出をおこないました。日本古文化研究所の調査は、幅約3mのトレーナーを南北に広く設け、回廊の柱位置にある根石を検出し、さらに東西に布掘りや壠掘りでトレーナーを拡張して、根石を探していたことが確認できます。

原稿執筆時は、平城へ遷都後に營まれた水田の床土を取り除いているところで、藤原宮期の回廊や内庭部の様相があきらかになりました。今回の調査で東面北回廊の発掘調査が完了し、その全容が解明されることと思います。また内庭部の様相があきらかになることで、藤原宮と前期難波宮との関係性の解明についても新たな進展が期待できます。

例年、調査終盤に現地説明会を開催して、多くの方々に発掘現場をご覧いただいておりました。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響により、公開をどのような形でおこなうべきか、検討しています。何らかの方法で現地をご覧いただけるよう工夫してまいりますので、どうぞ期待ください。

(都城発掘調査部 福嶋 啓人)



発掘作業風景(北から)



日本古文化研究所の調査区検出状況(北東から)

### 薬師寺東塔の発掘調査(平城第622次)

薬師寺東塔の発掘調査は、薬師寺東塔保存修理工事にともない、2014年度(平城第536次調査)、と2015年度(平城第554次調査)に実施しています。今回の調査は、既調査において修理工事用の素屋根基礎の下に位置していたため調査ができなかった、北面と南面の各階段の北端・南端部を確認することを主な目的として実施しました。調査は既調査と同様に、奈良文化財研究所と奈良県立橿原考古学研究所とが合同でおこないました。

調査では、北面・南面階段とも地覆石(最下段の踏石)の据付痕跡、抜取痕跡を確認しました。これにより、北面・南面とも階段の出は約1.8m、階段幅は約3.0mと判明し、階段規模が確定しました。また、階段の周囲には犬走り、雨落溝が廻ることを確認しました。南面階段では、雨落溝の外周に接して、創建時の舗装である玉石およびその抜取穴を確認しました。また、基壇および階段の外周部では柱穴を複数基確認しました。これらは、創建以来の東塔修理にともなう足場穴とみられます。

今回の調査は小規模でしたが、東塔およびその周囲の構造を知る上で、貴重な知見が得られました。

(都城発掘調査部 前川歩)



調査区(南面階段)全景(東から)

### 興福寺旧境内の調査(平城第625次)

2018年に落慶した興福寺中金堂は約300年ぶりに参拝者を迎えてます。今回、中金堂の北西に位置する鐘楼と、五重塔・東金堂の西面を隔てる回廊の整備に必要な情報を得るために発掘調査を実施することとなりました。興福寺の縁起等をまとめた『興福寺流記』によれば、鐘楼は養老4年(720)8月以前に造営に着手し、天平宝字年間(757~765)には完成しています。興福寺の諸建物は、奈良時代創建のうち幾度も罹災し、そのたびにおよそ旧規を保って再建されたことが発掘調査でわかっていますが、鐘楼は、享保2年(1717)の焼失以後、再建されていません。いっぽう、五重塔は東金堂の造営着手に統いて光明皇后の発願によって建立され、天平2年(730)に完成したことが『興福寺流記』にみえます。現在の五重塔と東金堂は15世紀前半に再建され、国宝に指定されています。

奈文研では、興福寺の委託を受け2020年7月1日から発掘調査に着手しています。鐘楼では、遺存状態が良好な箇所が多く、基壇構造や建物構造の解明に重要な情報を得ることが期待できます。鐘楼は鎌倉期以降の絵図に袴腰を持つ姿として描かれていますが、この建築様式の成立について遺構から解明できる可能性があります。また、基壇裾西側を中心に焼土と炭が整地層を挟みながら幾重にも堆積しており、文献にみえる罹災と復興の履歴を示しているとみられます。五重塔・東金堂の西面を画する回廊については、回廊および門の基壇の東半が比較的良好に遺存していることから、門の規模、基壇構造の変化等について重要な知見が得られそうです。

今後の成果にご期待ください。

(都城発掘調査部 森先一貴)



鐘楼基壇裾の焼土堆積(北西から)



## 平城宮・京出土の「麦塙」

平城宮や平城京で出土する墨書き土器のなかに、「麦」と書かれた須恵器塙があります。なかには底部外側に「麦塙」と墨書きした例もあり、「麦」字が「麦塙」の符牒であったことがうかがえます。その口径は17.0～20.0cm、器高は5.0～7.5cmで、須恵器食器のなかでは大きめの深形塙になります。

天平宝字2年(758)におこなわれた金剛般若経一千卷および千手千眼経一千四百卷書写事業のときには、この麦塙を150口請求しており(「東寺写経所解案」、「大日本古文書(編年)」13巻476・477頁)、麦塙が「麦」すなわち索餅(小麦を材料とする手延べ麺とされる)を食べるための食器であったと推定できます。しかしながら、このときは麦塙の代わりに「水塙」<sup>みずますり</sup>が支給されており(「食料雑物納帳」、「大日本古文書(編年)」13巻254～257頁)、類似器種で代用されたことが知られています。

「正倉院文書」に登場する食器の名前と、平城宮・京出土の墨書き土器とが符合したことで、奈良時代における食器の用途や役割が少しずつあきらかになってきました。  
(都城発掘調査部 森川 実)



「麦」字原寸大写真 (平城京二条大路 SD5100 出土)



## 『藤原京右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告』の刊行

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、昨年度末に藤原京右京九条二坊・三坊および瀬田遺跡の発掘調査報告書を刊行しました。

この報告書では、2015年度から2016年度にかけて実施した、ポリテクセンター奈良（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支局 奈良職業能力開発促進センター）の本館建て替えにともなう発掘調査の成果を150頁にわたりまとめています。その成果の第一は、西二坊大路や坪内道路、整然と配された建物群をはじめとする藤原京期の遺構の発見です。

成果の第二は、弥生時代後期末の全長約26mの大円形周溝墓S Z4500の発見です。残念ながら、墳丘や墓壠は削平のため残っていませんでしたが、墳丘をめぐる周溝のかたちから、それが「前方後円形」であるとわかり、調査当初から大きな注目を浴びました。また、周溝出土の弥生土器はこの墳墓の年代を考えるうえでもきわめて重要です。この報告書ではおよそ230点もの弥生土器を載せることができました。製図におよそ1年を要した出土状況図も、附図として巻末に綴じてあります。

第三の成果は、纏文時代後期末の土器群の発見です。滋賀里1式の土器は西日本でもまとまった資料の類例が少なく、このたびその貴重な一例をくわえることができました。

この報告書に掲げた資料が、さまざまな方面で活用されることを願ってやみません。

（都城発掘調査部 森川 実）



『藤原京右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告』



## 酒船石遺跡の亀形石槽・船形石槽（復元品）を新たに公開

飛鳥資料館の庭園の石造物に、酒船石遺跡の亀形石槽・船形石槽が加わりました。

亀形石槽・船形石槽は花崗岩を用いた実物大の精巧な複製です。周囲の石敷と湧水施設部分は雰囲気を再現しました。亀形石槽は、製作した石工の左野勝司氏から奈文研に寄贈されたものです。左野氏へは奈文研から感謝状が授与されました。

今回復元した石造物は、酒船石がある丘陵の北麓、谷底の湧水地点に造られていた飛鳥時代の導水施設です。周囲には大規模な石敷きの遺構が広がり、その立地や規模、構造から、天皇や国家にかかる重要な祭祀の場だったと考えられています。しかし、史料上にはそれらしき記述はなく、亀形石槽のところで何がおこなわれたのかは謎に包まれています。

湧水施設から流れ出た水は船形石槽に溜まり、その上澄みが亀形石槽へ流下する構成になっています。亀形石槽は栓をすれば約200ℓの容量があります。亀の顔や手足はどことなくユーモラスな姿をしています。

みなさんも飛鳥資料館の庭園で古代の祭祀を想像してみませんか。

（飛鳥資料館 石橋 茂登）



酒船石遺跡 亀形石槽・船形石槽（復元品）



記者に説明する石工の左野勝司氏

## 【奈良時代の疫病対策】

新型コロナウイルス感染症が世界中で流行し、感染防止対策として私たちの日常生活にも大きな変化が求められました。そこで平城宮跡資料館では、2020年6月16日より7月19日まで「古代のいのり－疫病退散！」と題して、奈良時代の疫病対策に関するミニ展示を開催いたしました。

奈良時代、天然痘が全国で猛威をふるい、特に天平9年(737)の大流行では政権の中枢を担う藤原四兄弟もその命を奪われました。展示会場では、呪符木簡や人形などの祭祀具や土器といった出土遺物をとおして、当時の人々がどのように疫病に立ち向かったのかを紹介いたしました。

二条大路の路面に掘られた長大なゴミ捨て穴からは、ほぼ完全な形をとどめる食器が多量に出土しました。出土した土器が完全な形をしていたのは、天然痘の感染を防止するために、まだ使える食器を捨てた可能性が高いと考えられます。また、平城京では、天然痘が流行する以前は比較的大型の食器が用いられていましたが、奈良時代後半になると小型の食器が使用されるようになります。この変化の理由について今まで特に言及されてきませんでしたが、まさに今と同じで、大皿での料理の盛り付けを避け、個々に取り分ける新しい生活様式が定着していった結果なのかもしれません。

展覧会には、多くの方に足を運んでいただきました。来館者からは「昔の人の疫病に対する考えがよくわかった」「当時の人々が身近に感じられた」等のお声をいただきました。今後も皆さまのご期待に添えるような展示をおこなっていきたいと思います。

(企画調整部 藤田友香里)



展示会場風景

## 【仁和寺史料 古文書編二】の刊行

歴史研究室では、全国各地の寺院が所蔵する古文書について調査研究を進めています。中でも、京都府右京区御室にある仁和寺所蔵の古文書については、1958年より調査を進めてきました。調査開始から55年を経た2013年、長年にわたる調査研究の成果として史料集『仁和寺史料 古文書編一』を刊行しました。その後、2020年3月に続刊である『仁和寺史料 古文書編二』を刊行することができました。

古文書の多くはくずし字で書かれています。これらを解読するところから史料集を作る作業は始まるのですが、これがなかなか大変です。解読した後は文中の内容について検討をすすめ、いつ・誰が・何を言っているのかあきらかにしていきます。また、こうした根気と時間のいる作業にくわえ、文書の寸法や紙質など古文書の重要な情報についても集約して掲載します。以上のような一連の作業を経て、史料集はできあがっています。

本書では、主に室町時代から江戸時代の古文書を収録しています。朝廷や武家など日々の権力者との関わりを示す文書が数多く含まれ、織田信長や明智光秀といった有名人も文中に登場します。仁和寺は別称を御室と言いますが、これは元々天皇の居所があったことに由来しています。その後も皇族が代々の住職をつとめるなど寺院としての格が高く、皇室をはじめとする権力と密接な関係にありました。本書の刊行により、こうした仁和寺と中央権力とのさらなる関係が解明されていくことが期待されます。

なお、本書は吉川弘文館より発売しております。ご興味のある方は、お手に取っていただければ幸いです。(定価 税込¥12,000) (文化遺産部 橋 悠太)



『仁和寺史料 古文書編二』

## 飛鳥資料館 第11回写真コンテスト「飛鳥の祭」

今年はコロナ禍により、多くの祭が中止や規模縮小になっています。こんな時だからこそ、飛鳥資料館写真コンテストでは、「飛鳥の祭」をテーマに写真作品の募集と展示をします。

飛鳥時代の都から、農村へとうつりかわってきた飛鳥の地。ここでは、四季折々、さまざまな祭がおこなわれてきました。自然に祈り、自然に感謝する村の祭。飛鳥時代の神事や歴史を偲ぶ祭。飛鳥の魅力をほりおこし、にぎわいを生み出す祭。人々の営みや祈りとともに受け継がれてきた祭は、飛鳥の歴史と今を映し出していました。

多くの祭の開催が難しい中ではありますが、本コンテストでは、祭の写真を通して、祭に込められた人々の思いや祈りを記録して発信することで、飛鳥の人々の気持ちをつないでいきたいと思います。ぜひ皆さんが撮影した「飛鳥の祭」の写真を飛鳥資料館にお寄せください。応募写真の作品展も開催しますので、写真を通して飛鳥の祭の魅力をお楽しみいただけます。(飛鳥資料館 西田 紀子)



応募締切：2020年10月5日（月）必着（詳細はホームページ、チラシで）

展示期間：2020年10月16日（金）～12月6日（日）

来館者投票期間：2020年10月16日（金）～11月15日（日）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（月曜が休日の場合は翌平日）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561

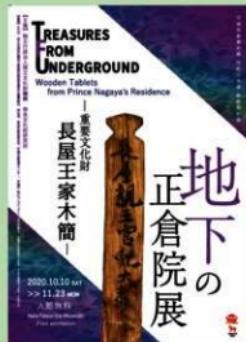
## 平城宮跡資料館 秋期特別展「地下の正倉院展－重要文化財 長屋王家木簡－」

今年も平城宮跡資料館では、秋期特別展として「地下の正倉院展」を開催いたします。本年3月、文化審議会の答申により、長屋王家木簡1,669点が、国の重要文化財に指定されることとなりました。そこで今回はこれを記念し、新指定の木簡をご覧いただく展示を企画しました。

長屋王邸跡からは膨大な点数の木簡が出土しており、それらには長屋王の家族や彼らに仕えた多くの人々が現れます。邸宅内の人々に米飯を支給した伝票木簡からは、具体的な家政運営の様子が浮かび上がり、食料などを進上する際の木簡からは、長屋王家が大和国やその周辺をはじめ、各地に多くの所領を持っていた様子がうかがえます。

今回の展示を通じて、奈良時代における上級貴族の豊かな暮らしぶりに思いをめぐらせていただければ幸いです。

(都城发掘調査部 桑田 調也／企画調整部 藤田 友香里)



会 期：2020年10月10日（土）～11月23日（月・祝）

I期：10/10（土）～10/25（日） II期：10/27（火）～11/8（日）

III期：11/10（火）～11/23（月・祝）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（月曜が休日の場合は翌平日）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

## ■ お知らせ

YouTube 開設しました！ 【公式】なぶんけんチャンネル

## ■ 記録

### 平城宮跡資料館 ミニ展示

6月16日（火）～7月19日（日） 2,846名

「古代のいのり-疫病退散！」

### 平城宮跡資料館 夏期企画展

7月23日（木）～8月30日（日） 3,968名

「奈良の都の考古学 発掘された平城2019」

## 飛鳥資料館

8月4日（火）～9月22日（火）

3,212名

「飛鳥の石造文化と石工」

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール koho\_nabunken@nich.go.jp

発行年月 2020年9月